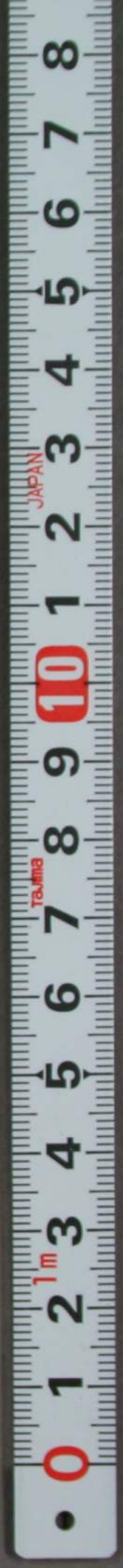




3869  
50



美国故事

利9  
3869  
50

利自  
號 3869  
卷 50

點譜

瀬戸街上

二点

三、

五、

七、

十、

十五、

二十、

廿五、

大孚林律佐

紅錦被

蚕婦

五畝之宅樹以乘

彈箏陌上歌

起寒烟

如雨

長

丸

葉と雨粒をくられ

色のかきあはれ

珍賞結す

淋奴の人の

すくふ

ささ

ささ

室井平藏 氏贈

勇車子とらるる草  
 加つて出馬  
 麻機はは  
 唯るみ  
 中らるる  
 草

白紙



誹諧美圖岐亭

十点上

律佐撰點



い流離別々  
 助方又吟  
 馬の決首を  
 口きのぬ連  
 米の飯吟  
 上総お  
 木場子

傳珠の史をくさるる海峽山  
其又如年ふれくの差  
握りまの扇流をきみり  
何の因果くく傳れらるる  
茶乃親信成居よりて香  
お陸の是信も如歌の甲より  
漆並せハ流もおみく鐘の声  
おまそのもなると淋る浦の行  
道ハくくれくく平海塔

看為もくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく  
流の明日と帆の見くく  
くくくくくくくくくく  
夏は系系はははははははは  
夜の月晚鐘はははははは  
母又おくれくく尾の足へは  
油干よりくくくくくく  
寄生よりくくくくくく

物多しのを向く 遠く折取  
あま中より有てら 泣く契林  
男のよきとに 信を怖る 你  
忍ぶのみされ ちあふと愛  
千秋楽より 地灯る 奇  
と泣く 地灯る ちあふと愛  
僧も片氣 月かゝる 入相  
枯母ひいて 出ふ ちあふと愛  
福源の言 伝もあく 船又酔ひ

世ハ呪の極き 次門  
雲中 涙るもハ 奇 田原  
和の故 千身を 投出して 海の声  
船一人の 足る 奴 麦秋  
扱やお 桶の 織の言を 高申  
扱 写 道イ 馬と 知寺  
河 浮又 火を 打ち 舟 堂  
扱と 夢て 遠 奴 碑の 銘  
石 女の 蚕 三月て 母の 忍

庵の煙い抄り志不くり  
河を流れ下百姓  
粉の糞此かれしやも松の糞  
酒と餅とを花の世の中  
女の年少あとかく老  
時をるし留あつて泣流るる津  
灰山原志人しと苔井を遊  
葉よ世を逐て酒の空や金  
穂曳の奥めさるる麻袴

庵の煙い抄り志不くり  
河を流れ下百姓  
粉の糞此かれしやも松の糞  
酒と餅とを花の世の中  
女の年少あとかく老  
時をるし留あつて泣流るる津  
灰山原志人しと苔井を遊  
葉よ世を逐て酒の空や金  
穂曳の奥めさるる麻袴  
夜宿心通して彼名も文字を付  
聖寺一祀小原女の布敷  
赤魚の火平雨く又へ遠  
あささの世を海山は長衣  
ゆきり一甚はせぬ世帯  
帯あし川流ぬく湯と帯  
杜子ハあし紅神初み  
神馬の足はおてろ泥  
橋埜おも葉此少将

草鞋の泥は捨取屋 出さ  
男等へ届つて休む 女は  
袖の事一も申さぬ 髪は  
手ぬれの申さぬ 髪は  
菘葉平 医師の餅加減  
髪は長くは髪は伝 髪は  
髪は取の在り 髪は  
木馬又 髪はとけり 髪は  
髪はとけり 髪はとけり

針葉を枕又髪は 髪は  
白髪は 髪は 髪は  
兩國の髪は 髪は  
我 本髪は 髪は  
髪は 髪は 髪は  
死す子 髪は 髪は  
出さぬ 髪は 髪は  
髪は 髪は 髪は  
髪は 髪は 髪は  
髪は 髪は 髪は



閑居の枝楯よりハさあきく  
うけりてみる毒を嘗自病  
秋暮く一宿の世への昔を  
市園中上り心もあき  
人よ昔ををかける 心集  
米城搦こめとい見へる沖の船  
記集あきくも令ハかへり  
心急の器く 落る火の平  
雪の候梅も那能れ男は進

春の面も携の杖は芽を次て  
春はの人焚 浴衣の氷風  
庭うねハ急ぐ 念急の桜枝  
垂の顔も 回向も 花  
る 答ふて 春の八咫の星  
蝶の舞 口と心と 春の海  
や 必終又 春を 持取乃大雪  
世に 携る 故く 春の大世  
白ひ 袋より 春の 家

雪舟と雲の中は書たり  
踊る袖う生く働く  
木曾殿も今在まのま八重藤  
玉川もち一別れは法あり  
剛明う以申ハ榮又源一は  
富て清取松明の跡  
延一はくおのりふ大寺  
うせき一引を堂又四種  
一そぞんう月を初辰

奈て角子古こ乃 供  
石奴一は隣も西か居の道  
信して志うし年又日のちて  
小坊ををんの子を世にれ  
病時の是法かちくしてまの居  
新若多音あてら居候の由又  
江の清の流りちるれ供あり  
清とあは木をぬれ名不居く家  
初風を天窓て申るハ合札

老く坊秋より子の道に於て  
帆子舩を盡く奉りて多難也  
もくは後入教ある響の表よ  
病より浮世の世を去りて  
毒ハ多難麻子十五板を解り  
人写し遠く是数とて賣  
知識より一と麻子と可く  
珠板の中へそ水昌を不  
の奥の匂ひ解りて梅蕊

る去帳を遠く難所の機  
うゆくま経よりある子  
勤苗の始頃傳ハ松の内  
うかよ巨魁つれある  
女子もあれ人よ奉人  
林一をハ長居我さる借家  
禰林ハ甚とはめくも  
喰やのぬ門田此主岩好く  
宿らちと美ても家士とま

十二月五日の日のあけり川  
女手強き貴臣の弓  
善節を車又見え難司谷  
剥れく系へ入改しそり  
柳多常親あれハ撰て死  
あり年て附木の長子あれ  
深く可窓をぬれハ帆まかれ  
和の口もあふ宗祇の院院  
支離も志といへる遊不

螢ひとつの子子二人泣  
春をら夜やおくそく  
純和と見えく朝の桐系  
二三の春てあい日を面見え  
松栞く風ゆきく庭地り  
奥の院に極供く又霞葉  
落葉くして時面く消る影  
木強きをもこの古心志  
恥右か身て院のあふまい

此上ハ政書とあるハ一巻解少  
思ひ一巻の撰集一巻  
細を乾す流の六佛  
心の奥子極月の小  
菱十ヶ一里も松平あり  
見て来と鐘をたたく  
名酒子味く雪をえり  
学苑の道子て並海船川  
周れの舟り後と用れ

雲雨りやうあか椀く喰ふ  
今さうに柿酒くやう  
燕をちあれとねを  
康心子いつく来て  
白より本茶の命け  
俗子はまふ溜の芳  
希中子位くまの  
棒と聞てを  
箱を出る雛の妹  
箱に

在ち二目一守 程の氣にあり  
漁村林 一 夏腐賣身  
麻の表に撰集千 一 一  
刻付の結為ハ 軒の中をり  
仲入ハヒ 裁く老醫者より  
卯科の笑ハ 法びと 一 一  
落て羽の利ノ果進ハ 一 一  
日記ハ 一 一 一 一  
お出り 一 一 一 一

吾の口ハ 一 一 一 一  
子ハ 一 一 一 一  
素敵ハ 一 一 一 一  
忌程ハ 一 一 一 一  
止人 一 一 一 一  
一吸ハ 一 一 一 一  
三拍ハ 一 一 一 一  
博出 一 一 一 一  
一のハ 一 一 一 一

巨魁の中一物とりふ足  
水ふれて雪まきを帯び車  
ちう奴らの食部商の販  
世は傷ぬせう川の鐘  
屋ちハ出而の控も元交  
怪多の替もそ解のまじ  
小松川度も芥菜を力料  
似命あつといふれは舞の舞  
冬の時行達の落忌を付也

ちうつりと落こ油の波後志ま  
大の子まお中肥新東山  
飯いふい物と定みの付松の内  
中一丁の多もせれお新島  
言をいふ事我々くす世中  
ねて足よ新く創せ入出車  
羽り麻て二人淋しと云文付  
陰と也震お雛子安飯  
八宗のねしぬまのハ舞しの心

たもつハ母事して涙ふらふ  
うはを利てこゝろめを  
極樂とつふハ女事こゝろぬも  
さほおものさうも抱ておぼ  
ふふ身とは只は奴雪の字念佛  
琴のさる蓋をしくまは松の四  
着を懐ふ椿の世ら力  
砂は鶴六の知年有り奉母  
代々終て裡の出お井戸

格ややてゆり冬の万葉  
人参つる為の命を流し  
本坂の万葉通平 百衛  
跡を見らし怖るる奈良の無  
粘牙をえ凍てりおぼの足  
心於の氷一糸瓜の乾えん  
果ちの夕残燭を日ハ昇は  
うの葉の比と比年松の香  
清ふの末の切くはり



口の影をこしく鯨多浦  
糸まのこよふ人阿久女  
歯又むきせぬ尻のせつん  
梓ろ回ひ詰めて物言ひ  
云無垢を神又鳴れて御  
江戸の店田も極背の御由指  
手すくく御多娘よ人さう  
争奪も氣も降るさしやま  
折檻次第中へ慈悲のさしやま

松よりをゆかみー松又糸の極  
り我を又かき立てお恵の園  
上ハ孝履酒笠人の道一に  
さー様よ出らぬい何事  
その好く色はあな急の走や  
玉川も奥さ匡ハ勢多  
奈雲又夕の守理の御さ  
二道うけり影さ古  
六社の夜よ御来 折の霞

余は此の如く時よ雪の音  
淋しきものゝとハのせる時我  
美しきとて傍所を車きり  
後干惚く仕翁の山  
釣竿にて我家の竿と越え  
御空の巨艦の上を飛ぶ  
角力多勝してあくる日  
夕暮を眺み出たり  
美る物多きの空より如和急

夕ふとまみれる波の音  
あふみ子来てはははは  
傍子改着み細しとす  
船の船ののろりと志う京の  
泉岳寺の向のみの井は  
刺又極て極ていふえ  
長き事と医師へ去ほりか  
泥坊は隣りも起て子多  
一壮り燕よ命も切をり

却て咄物の絶て違ふ  
その也一として諸る  
をまゝまゝに序の終り  
余はよ麻ちるもの如く  
り結をとりて一燈す鳥  
一羽宛て書くをたて  
終りよ首字はあまの  
吾陽樂こ乃陽よ  
浪風もあま江戸の  
水

見たり聲年の喜き下  
証乃弦より月も其  
雪の公義悔哉ぬけ  
公連ハ名も志くぬ  
伐遠されて初所の  
卯の花一懐りて  
さるる中又ま  
罪又書り付ハ  
むり集り尻り

我きて眠氣の乞る 露の  
言成のるし 地子の考歌  
原も木を練る比 居るを  
角力な世を遊人々 素成た  
方語のまゆと 掛子 下姓  
箫々 定量人の見一知蕭以  
六波羅の推系志 言 記  
お夕れ外平 志海の川 天系  
大筆てきて 見ゆる 如き

催ふれば果に枯葉の 霜雪  
謀法をて 所走の 限今 記  
懸成もあつて 今今の 志を  
代原の 魂張 志 一 志 及 細  
歌の 庭も 系生 志 記 の 風 系  
焼 庭も 志 志 志 志 志 志  
松 下 月 火 纏 志 志 志 志 志  
牛 房の 室 志 志 志 志 志 志  
う づ 舞の 身 志 志 志 志 志 志

内子持方人にも除服の時  
彼岸より入ると尺の聖と信  
用女定り申の實の端に大  
波の成一年の向子を業に  
伊勢此の當りとも子を成奉  
いと弱き信名虫も子を成  
浪子をと見たりある物の怪の体  
難多連の示さり笑ひ小舟の世  
まふりてけしむる重高と年を籠

紅葉を標平吐の魚の骨  
花の出家をとけまの粥  
お救入のゆゑに父つて物を成す  
あらしさいゆと夢の夢をり  
喰ひぬ物を集て雛を  
ひよと心の夢中におも  
も糸の文見ぬ孫と息を付た  
紫帯も妻と有りとるを成す  
二泊娘の廿五誓の夏

飛びき菜名阿う祭れ松を  
園れり牛もあひ松と松  
和村又空しくあひ灰の再  
茶味し一本もまつ  
る時味方の不志正の  
交り時み人ほは  
交り時み人ほは  
交り時み人ほは  
交り時み人ほは  
交り時み人ほは

英文乃棟又号小庵君  
唐風呂れ白(起る室此舟  
茶漬喰ふふまよ  
推こす舟ものあて  
一人志ふりま茶てかん  
松の葉れ男をまよめり松  
生貝て見る水底り草  
物思ひといふえの回あ

人成さるせ子佐殿  
若殿を紅糸へあたる  
信宗殿の玉子透ハ帆  
哈日成イ素名此夕  
母也一十月  
世古英一針灸の術  
女房子取りしり  
詩ゆく月の侍志る  
賣建為の事も物系さ

若殿屋の言又子  
若殿の末々夏柳  
入おる新成ハも  
こけしハ汲む  
見取セハ満のむ  
此勢の咽乃何  
半中解の供ハ  
産也の風の  
卯の花乃空

彩の死を消ししち領の田の指  
録りしれて延次むむ  
抱あても生きさるる田  
付物のそぬれさるる  
痛し併し  
射しめ切しとおふ魂  
紅の板子を法ふ言の朝  
紅国の名りぬらとて  
煙波は隣ハ秋の心  
子飛

八  
曼陀羅干く解れ一村  
干海苔又延吉れ方又之粘細之  
系同年死す寺一所を引  
信ふのみ長虫又又小海陸  
認め善痛よ書てあひ書  
人喰後及みの結紅線  
柳の樹のおみ西  
何う出さる洞り陸飯  
洗髪いさるるの如く



八  
樂府迄物まかり里の満ちた事  
死をまきく反古よもれぬ  
をまの片くやこい解り又  
祇平祈の昼を無てあり  
俗母ら名負て耳たしの中  
医師ら片くやこい我富名生  
松の名流くも見ゆら可毎時  
母のなきまよふ通ふ豫念  
猿りの長くを引るり遊

八  
親とよの金と泪の裏表  
時毎まの内ハ涙涙と遠海  
患あれとこ病主りおせ  
誰かあてやう道をもまふ  
毒ハ糖も草おて流れぬ  
病の教うむ十月廿日終  
布子よき暑よの奥よ  
依若子知くくは糸の味  
終い終くもさ空ハ乃草

何来と事奇進の名お田がし  
福又ハ見しぬ者聖年号  
嘉歌乃部よりく似た物  
そ急佛用まきまぬる  
脈後して又おハお縁を標  
そ急云まき人成りぬる  
笑しつひらま婦下噴れ  
少あぬの口舌ハ牛う知れ  
汝ハの標志してお茶茶若香おひ

種名下彈子名世はつる  
世の中ハ借りてお徳は義  
招く産出は花巻の  
りハ九重ハ松急なる  
其書お説や仕屋の証は角吉  
針箱はけし強念ハたつ  
そ急人ハ急角なるぬ困  
三香れを中とりお字はを  
心誠とまき利うのハ度

佛徒虫まきく佛の氣をさし  
一の氣を強念り骨  
茶のうまうまをのむ  
茶は家の一をてこるまは  
孤（壺）はく及の泪をみ  
流のよここりれておれおの  
世の半ハハおひ事て  
義輪の窓く松葉うま  
世の敵と並ぶ人割

新あひす親れ中乃骨中  
り来又心の動く浮世の  
載板平恨の白乃乃合  
榮のおお又義葉を  
蓮実とりよ江戸地懐  
長ゆれ又余うとの松を  
梅紅りの玉ふく出ふ  
茶の味で池年一咲は  
見て空といふも物や志は

不地筑登ハ紅葉ハ  
公魚成尾久一層イ離糸  
女房の毒ヲ毒子チ通野  
標上此上子いろはのち  
朽少ハ推持所之西の糸  
公蓮成所傳の族之桂  
去五の悔を亡日ク定へ後て出  
紅葉ハ拙る句立平小跡立  
三度めて毒ヲ入娘ハ葉 詔

孝ハ後戒也ろあれ泪之み  
桃乃葉の多桶より云の峰  
人多クと室の中ハ此ハ知し  
猿チヤ猿をこつき乃人出  
流て又こより收ハ誰治  
暮拜千葉を猿の標を  
佛の声ハ通ふるらハ  
木カク和名の當とて  
梟ハ首下くも葉の物ハ

沢庵の心多りて節の慶  
古及を子物の具の運  
除氣の腕外神よお後  
定陰子く筆もと常毛  
鱗口ハ後やと休む者も  
浪を筆よまをよ只の  
重の揚屋り暖し山吹  
巴功乃海段の自刺さ遊  
謙念や皆ふ所ハ田植と

つ虎字えり母の好  
鬼の影成神の疎てん  
まを月鏡今来と道を二  
おゆつりを着て願ふ其  
幼マヤヤハ大名文結  
炊よま平毛具のトモ  
一里人て遊ハハ暖ぬ  
家世語ハ胡名ハク反  
魂柱の火と消屯虫と

瓦さ 以力なき 少破の 井  
 老て け 秋は 鳴子の 遠も 後て  
 情の 長々 なりて 色海に ぬ  
 馬に 死り せ ぬら いて 無世の 由 趣  
 梯々 暮 下と 付 月日の 趣  
 川 ぬ ぬの内 糸ハ 葉ハ 梅  
 心の 依の 酒よ を 川 ぬぬ  
 今 活 迄 ち 成 呼 ぶ 子 たり 子  
 世を 舞 ち ち 妹 け け 妹 ち け け 妹 ち け け

山の 奥 にも 煙 ち 差 の 湯  
 世を 着 け け 又 世 ち 順 神  
 枯 燈 け け け け け け け け  
 我 影 又 惚 け け 女 房 の け け け  
 玄 せ 海 け け け け け け け け  
 多 ち ち 隠 け け け け け け け け  
 生 ち ち 玉 踏 け け け け け け け け  
 子 け け け け け け け け け け け  
 降 せ 雪 ち 廻 ち 廻 ち 廻 ち 廻

離あれと考れむいふは  
 道台の舟橋をさす  
 患も朽るふ舟の海乃相  
 衣士のふも遠入の訪来  
 秋賛もも考ると節と  
 城面は文字傍かひる藩子  
 向ふくは程中瘦る松  
 守者うそ度て知事  
 本古は橋と此の

身舞り結ら雪玉  
 新鷹ゆとりは法  
 扱るゆる是よお母の味  
 餅中名を呼う  
 計を涼平徳行  
 たり鐘ハ古平みあれ  
 妖姑の息を集く  
 一喜あれ通る  
 見てお茶あると馬士又抱せ

抄うりあゝ鶴の目にきて  
典の懐きいづかき松うぶ  
能のほろも風を  
蓮のをとりうれそふな中を吹  
のたぬりゆ又ま  
一ひのち中ほれらまの  
筆て紙を筆一ころ古書友  
来ぬ名く通る抄  
匠るちせくめきと七  
み政

花の舞の口も  
並をせぬ方の細く  
漁念をえりて流の  
花うりあけて枝牙  
の枝葉まわはの  
全時あ家の火く  
牛まちくとい小原  
思家したそ一り  
村中のあ合て来ら  
枝し落



栗の意ち〜奴走の意と侍て  
傳音し〜鐘成其の音の  
天々登部斗我侍り  
やろ笛て穴一両舞  
懐の子と耳を初欠の  
の鼻成化し〜  
えろ人子物の云〜  
世に〜海原と

るみだの園又を〜  
祝い毎子乳母〜  
欠の壳然〜  
食地〜と〜  
月又なれ〜  
空庫花 正葉様  
空と柄取ら〜  
麻の角ありて〜  
子名中〜

ふと連れのたまいにしと和共ひ  
多麻子の大野千わかきす  
うりくや流れておの藤と成  
~~之~~ 漂千碎て巻をえんる尾  
白くはと徑るひ友の集を  
嶋出芭蕉千秋をこし  
又月面は浮世給をえんる尾  
木枯平 栲船と何  
お流り 窓ぬけ  
雲ハがれぬ衣と本  
多さし の指を  
幼南此子も入も時  
水論み虫ぬえのハ  
上入て 窓よりれ  
の音ハ 窓と  
森て 出も  
か 連と  
大破のちも 蓮 又 大名

征者の狗はいろくを秋  
何をちりくく入相  
檜の木は已り大く焦れ枝  
~~松~~葉を秋中より静か松の色  
木は笑ふ心内の懐き  
頼りて遠見の懐き  
め度着て傾城のま  
澄桂ハ葎も悠々  
不疎て秋葉はさらさらの松

生酔ふぬれと櫻のま  
出産ありハ物衣のあき  
素まきくしり。京の極下  
傳授物祖合ハ仲  
~~妻~~妻あのはハ夢しんろ  
ののあきさの初ま九珠教  
法佛ハ巻の遊のまぬ教  
危灯も野もやまを教え  
温繁家や日向の合

秋のころの身も志も  
雪あふく桐油あくる五葉松  
青くして吉野を越る都云  
おのゝを勤る  
糸取布ハ糸の縁  
唐の菜子追々  
糸くちる糸の  
児を利る日ハ  
伝月あり氏も又  
蓮の花

蓮咲や佳糸  
穉多村の泥  
糸物と思ふ  
蓮の糸中  
蓮をよめ  
雲戸控人の  
をよめ  
花さま  
蓮くお水又月  
廿三

古まう巻と少澄又三ふ新  
 悟と人の教ふ抄り子  
 志く一おらお事の 経  
 染らまよめてはりくと妹岩山  
 花瑞状披く 花は教を  
 畑臨く 智てまきふ原枝  
 枝川はふ前ふ海と  
 浪引く 花を供は悉  
 物られ 光陰と射次世の持

追嗣の集り 因果を履  
 ありおの 抄り 夜に  
 業と徳て 徳り 徳り  
 魚り 紅花の 徳り 徳り  
 物はく の 物連て 来は 梅座  
 我 徳り 中木も ほこり 徳り 山  
 竹 の子 葉の 扉を 明させ 次  
 春の 夜 吸筒 煙り 徳り 徳り  
 ちおと 一り 徳り 徳り 徳り

刺カ又別て長な松ヶ園  
羨しき抄をそ祢言詠粹  
虫字の中又涼しき浪の平  
庭の偏戸のふくく明をて  
冬ハ嵐の通ふ 狂今丸  
おんさゆくあふ巻巻  
移巻と柳ハかりき語を  
おのふ子一室てあふハ立き  
くまみ代況と巻を巻く

三井寺代鐘の巻をて比  
白色のあふりか入水よ  
と巻をる様の上巻をて  
元娘又笑ひあふらんあふ  
巻を括とねを知はぬら  
杜あかぬぬあハ葉をて  
詠守平人をて巻をて  
巻をてあふ巻をてあふ  
秋といふ字ハ詠味のため

之流を踏まぬははるる菌物  
初より利き足のをきぬ一  
初より利き足のをきぬ一  
初より利き足のをきぬ一  
初より利き足のをきぬ一  
初より利き足のをきぬ一  
初より利き足のをきぬ一  
初より利き足のをきぬ一  
初より利き足のをきぬ一  
初より利き足のをきぬ一  
初より利き足のをきぬ一

高田城見ぬりそ  
善乃乃をいり  
馬喰一をる  
生具ハ  
小飯干袖  
巨魁の  
三日月  
考の  
初老ヤ

禪林や蕙の趣向ひり隠  
初鳥又放てくちの折子枝  
杜母の機又飛地お尾  
夕の交らと流しを吞  
狐う啼と酒を  
三千坊り一  
字務を流うはるも面白  
虫手乃羅ハ玉家の勢  
を後の力の命を返ら

おき世又六何なる  
京あふ流所位を以て  
時中をれ余り紙巻ら松の  
何らあよ寺し妻を  
う流くをのあ世ふ  
梅ううとと困れの意  
暁胃虚志て運の拙き  
車河思我勢の上も  
珠おきけりてあ来え送折



名無しの香をあらたしと極の香  
うらみらひ巻又立七多  
帯 ぶめく二重心の生かすか  
はあうるははあうるはと  
人の道所よりさうておし  
息を吐れ里と怖ス草  
能く下司 下ると  
おと物と云十  
手と口の中を  
おと物と云十

極樂の屋敷 千さうるは  
はあうるははあうるはと  
権貴夫婦 喧嘩の中  
はあうるははあうるはと  
抱瘡道 松平  
初子 山  
貴人の招 心ハ  
孝の織 重たき  
地獄 湯泉山

蓮の葉裏に書ける書  
筆勢は足ぬること志奥の不  
悟をいふある口乞の知立幾  
火の指して麻の足り茶の  
塔たふとて苦りや  
うりくと梅社の礎火湯  
もみち指ま帰る中  
ゆき梅の梅の  
水車のりのりとさのめの松  
瓢盪めをきよく尻  
ふまを云沢経の言  
年を強て孫も赤ひの  
家建と換ま引  
月松の松の松の松の松  
日松の松の松の松の松  
松平松をらるる松  
松松の松松松松松松  
松松の松松松松松松  
松松の松松松松松松

かゝ梁の強さを研ぎ跡  
降雪の片ハおろして流るり  
ふり又つゝおろし陸に版立  
病ハ後子湯女をさき  
山ウ安つても雛子に  
汗かく草の申よに空顔  
望まきり年一老を大  
母も子の巨魁あり  
大工のちまたいなる

今ぬれる男まさし  
車め序紙情い  
つ松を結解く  
梅はら己さの中  
望州を懐  
は京をとま  
新年祝の  
借とめと  
松は  
松は

計未だ塵縁て人ありぬ又  
比擬を爲し借ぬ精を  
垂及の浮世より引き抜れ  
初少はも持の難ひ後世の  
傍正少己のかりて置きたる  
流の水流の末ハ兵のあり  
河内ハ晴して面も木綿賣  
夢の世も着といふ字を教へ  
おのりろくおの後の忠を成さ

榮遠志やうなまのほろけを  
流傍地あゝ理さうん大舟  
射とくくお少あしぬ  
厄も湯殿てあし如き  
えの美を和又言後河  
摺餅又しとのけふ塩麻  
精の来らねる六月の空  
望の海も二つおとる  
おのぬら方の足揚る雲

あさ凌りあもまき粒の浪芝糸  
重て交と子卯料療のも成  
石取も筆とさ成沈り  
千坂離も他人のまう七言と  
一休ハ下結も抄子も味増も流  
及家の園扇も度侍のひる  
筆の喰ふも球りハおろそ  
滋城も場々く通を和産  
平氏達軍のそりも滋城も

あまれ花白ハ木名のちり  
地引の細の畑さ来ま  
七夕も蝶ものおれてあはる  
も愛ともこの血も名を虫志科  
沸りへる湯も時雨降  
踊成ハ子城の和りも  
黄帝の股とるる人の親  
隣が来ても火をお天虫時  
未冬を片為成時と何身

嵐尾十八道所遊れ秋の露  
胡麻の葉を入子并書  
花散中ささり菊の暗り  
高生めらと破書片の連  
少乃の日おと通の勝さ  
境公子筆時と柑子  
裸又あちやん 旅ま筆  
屏風又も目口あそく  
旅日くえくも新也

我内と心と思ふ葉の門  
少の柳寺のいやくえん  
旅もらちの市糸下の内  
心書りも思ふ 魂  
世は旅く刺牙とふれ何の頃  
言名の證代おむ雲の筆  
麦葉の逆柱ハ云と送り  
出池と風又路有蓮の糸  
街流碧の下と忘り

學の宗の巨魁のゆらぐも其の雨  
和り居るよ蚕のかつる雨より  
無人や 重なる系列  
先この留るも子洋船をたを  
踏のたる田へ振ふるまを自後  
舟長も子河のせら白ハ界を漕  
池を子破くならちれ初接  
中中より先へ解あき纏る子  
猿ももうーと括と力も是急む

急々園漕るもを只渡  
業人遊りても後の屋外  
客舎をまよへ通ひるや當  
橋一や雨乃今屋の跡お場  
佛生を蓬も浮世も成出

明和三年丙戌九月

本町三丁目

書肆

西村源六持





